

オープンシステムの幼稚園について

水 口 芳 明

1977年の5月16日から23日の間に、CanadaとAmericaのOpen-systemの幼稚園とMontessori 式の幼稚園との併せて9園の幼稚園を視察して来た。まず見て来た幼稚園を見た順に紹介して、その後でそれらの幼稚園とその教育について批評してみたい。

Early Learning Center, (12 Gary Road, Stamford, Connecticut)

New York から特別バスで道に迷いながらいった。建物は森の中にあった。2 acres (約2450坪)の敷地の中に、4000平方feet (約372㎡)のモルタル塗コンクリート建築の平屋建があった。園長のMrs. Margaret Skutch はinformal なMontessori 式の幼稚園であり、自らもMontessori 教育の専門家の勉強をしたと称していた。しかし所謂 Montessori 教具はみられなかった。このCenter はfree で、open で、warmであり、よく計画されている点で、Maria Montessori の“prepared environment”の理論とよく一致しているから、Montessori 幼稚園というのであろう。園児は2才から5才までの35人であり、先生は4人いた。子供は白人の子供だけでなく、黒人の子供もあり、これは法律によって強制されているようで、どこの幼稚園でも黒人の子供のいることを強調していた。それだけ人種問題に気をつかっていることであり、また黒人の力が日毎に強くなっていることを意味するのであろう。

Skutch によれば、古いone-room の学校はたった一つの環境で、厳重なcurriculum を教えたが、このCenter もone-room の学校であるが、subjects と環境とを広く選択させるのであるという。one-room はomnidirectional space であって、一つの境のない部屋は種々の環境を提供し、静かなcorner、明るい場所、暗い場所、open な場所、保護されたnook (隠れ場所)、思索する場所、work する場所、屋内と屋外とを容易に選択させるのである。

壁から壁まで、つまり部屋中に絨毯を敷きつめ、音のたたないようにし、子供が好きなところで坐ったり、立ったり、腹這いになったり出来るようにしてある。白人の子供が靴をはいたままで正坐しているのを見て、日本の幼稚園の現状を思い出し、奇異に感じた。空間を広くするため、一つの机と一つの椅子と一人の子供といった十脚類は排除されている。corner はコンクリートブロックの上におかれた厚い木の板によってしきられていた。このブロックと板による棚は仕切りとなると共に、便利な棚であった。この種の簡単な棚はあちこちでみられた。

ここではきまったカリキュラムは用いていない。組にも学年にも分けていない。図工のcorner、読書のcorner、理科のcorner などなどがあり、子供たちは自由に自分の興味に従って活動する。教師は質問しない。ここでは教育、正確に言えば知識の獲得は、どこでも、あらゆるところで、いつでもできると考え、従って形式的な順序を要求しない。知識の獲得は、random experience (自由な順序のない経験)によって得られるもので、きちんとした発達の一部として示されるときよりも、むしろinformally に容易に理解される

と考えている。

しかし子供に文字を教えており、数も教えていた。学校は週5日制であり、1日に子供によって3時間から5時間ここで過すのである。この学校は1964年に教会の地下室を借りて始めたが1976年に新しい現在の建物を建てて開校した。

Singer Learning Center(2630 Pitcairn Road, Monroeville, Pennsylvania)

世界的な鉄鋼の町、だが鉄橋に貨物列車を放置したままの衰えをみせている町Pittsburghの郊外に、この幼稚園を訪ねた。山の斜面をきり開いた平地にあり、ここも一軒屋であった。3 acres (約3,600坪)の山地に、one-roomの平屋建があった。木造の建物で大きな材木を使ってはいたが、上等の建物といえるものではなかった。

Singerとはあの有名なミシン会社で、一世紀以上も教育に関心をもち、現在は多くの教育機器を製作販売しており、教育研究所ももっているそうである。このcenterは現在ミシン会社とは何の関係もなく、補助金も貰っていないとのことだった。

Centerの建物は大きなopen areasであり、そこには伝統的な机の列はない。部屋の周囲に基礎的技能を学ぶに必要な本や材料を供えたlocationsがある。所謂Cornerと考えてよい。このlocationsには、算数、言語、自然、社会、芸術があり、日本の六領域とよく似ている。私たちが訪れた時は、特別に日本のlocationが出来ていた。扇や日本人形をならべてあった。園庭の柱には鯉のぼりがあげられ、アメリカの青空を泳ぎ廻り、新緑に映えて美しかった。日本人を迎える心盡しであった。アメリカのアイスクリームはおいしいそうだが、この幼稚園の先生方の手製のアイスクリームの味は格別であった。

日本コーナーの出品物は、父母で日本へいったことのある人たちから出して貰ったということだった。父兄に援助を仰ぐのはこれだけでなく、父兄の専門の知識や技能を子供たちに話してもらい、臨時の教師になってもらうことも少なくないそうである。それをParents Volunteer Programという。

このCenterの教育哲学は、二つ考えることができる。その第一は子供の個人的要求や可能性に基づく子供の特別な学習を計画することである。つまり子供のそれぞれの能力にあった個人的教授を主張するのである。その第二は、教育上の目標と社会的目標の両方を巧みに達成し援助するに、最も良い環境を選びつくることである。いわばCenterは子供に学ぶ機会を与える。その後は子供自身のCuriosity(好奇心)が追求していく。子供は興味をもち続けるかぎり、学習を止めることはないと考えている。

Centerはその教育目標を細かに12項目をあげているが、その第8に「基礎的な読みと算数の技能のしっかりした基礎をつくりその早い発達をはかること」とあったのが、私には印象深かった。

このCenterは3才から5才までのもの200人を収容し、教師は18人である。尤も2才半のものも若干いた。週5日制であり、保育時間は、全日制のものもあり、午前だけのものもあり、午後だけのものありという状態であった。

Carlyle School (109 Carlyle Ave, Town of Mt, Royal Montreal, Quebec)

カナダの公立の幼稚園である。公立の小学校の一階にあった。カーライル通りの両側には大きな樹が茂り、綺麗な静かな町であった。ここでは宗教によって、小学校も幼稚園も

異っていた。この小学校と幼稚園はプロテスタントのものであった。黒人の子供もいなかったように思う。

この幼稚園は、open systemではなく、クラス制であり、そういう建築であった。しかし床は全部絨毯を敷いてあって、子供たちは自由に寝たり、坐ったりしていた。見せてくれたのは、音楽リズムであり、レコードプレーヤーが動かせないことがあった。どうも女の先生はどこも機械に弱いようである。この幼稚園の園長のMiss. Anna Marshall は、日本に来たことがあり、子供に日本の盆踊りをさせて歓迎してくれた。次の時間はPのつくことばを子供に次々言わせて黒板に書いていってことばあそびをした。この幼稚園は日本の幼稚園と同じようなものであった。

Common School (Spleasant St., Amherst Massachusetts)

大きな樹が沢山茂っている森の中にあった。表の立看板にMrs. Emily Johnson によって1967年に建てられたとあった。open systemをとっており、corner 制であった。

「子供の目を見るな。私語をするな。子供の注意をそらさないように参観してくれ」ということで、その通りに参観した。子供が鋸などの刃物を自由に使っていた。道具の整理に工夫してあったのに感心した。運動場に出てみた。運動場といっても森の中の空地であり、大きな樹を切り倒し、それを腰掛けに使っていた。木に縄をかけて登っていた。

Meeting があるというので部屋の中に入った。ヒッピースタイルの男の先生が、年令のまちまちの子供10人を集めて本を読んでやっていた。驚いたことに本を読む前に、先生は子供たちに、「聞きたくないものは聞かなくていいんだよ」といってから本を読み始めた。私は被疑者に訊問するとき、あなたに不利益なことは黙っていてもいいのですという黙否権を説明することを思い出した。年令のちがったものたちに、一つの本を読んでやることに疑問を感じたし、そういうMeetingに何の意味があるのかと思った。

ここには全く楽器のないことに気付いた。一般にアメリカの幼稚園には、日本程楽器があるように思えなかったが、ここは全然なかった。音楽はしないのかと尋ねたら、歌うとはいつていたが。

Amherst Montessori School (744 Main St., Amherst, Massachusetts)

園長のMrs. Margaret Smieh とMrs. Helen Boyden の二人の教師が、15人の子供を教育していた。例のMontessori の教具は一通り揃えてあり、その使用を説明してくれたが、同行の小路幼稚園長井上文克氏が、「こんなもの二回もすれば子供は知ってしまって興味をもたなくなるよ」と言われたが全く同感であった。Montessori 教具には心理学的にみて疑問のものも多いし、あんなものだけで教育になるだろうかと思った。

幼稚園は教会の一部の建物を借りているようで、家賃が高いとこぼしていた。その建物は木造であり、余り立派とは思えなかった。

University Day School

この幼稚園は広大なMassachusetts 大学の境内の中の森の中にあった。教授たちのような所謂おえら方の子供でなく、職員の子供達を教育しているところであった。5月19日の時点で既に夏休みに入っていて、子供はいなかったが施設を見せてもらった。ここも木造

の平屋建であった。部屋は one-room で、主任の男の先生の創意工夫の手作りのもので一杯だった。二段ベッド式の高いところは子供が好むといていたがそうであろう。そういう所を結ぶ通路が高いところにあった。屋根のある小屋も部屋の中にあった。屋外に出れば、木で階段を登っていく高樓があり、その一部には高い塔もあった。子供たちは確かに喜ぶであろう。しかし空間が一つの利用に限定されてしまう。そこに問題を感じた。Massachusetts 大学の Day 教授は、北海道大学へ交換教授として来日されていた時、大阪で話しあった人である。今度もいろいろ話し合ったが、それは後で述べることにする。

Lesley Ellis School (Cambridge, Massachusetts)

Boston 市に続いている Cambridge 市の町中の街路沿にある小さな幼稚園である。だが街路そのものが大樹に覆われたようなところであり、この幼稚園内にも大きな樹が幾本も茂っていた。幼稚園だけでなく、別の建物に小学生や中学生もいた。幼稚園の建物も古いもので、従って部屋に区切られていたようであるが、それを現在は corner 風に使っている。この幼稚園は 1886 年に Arthur Gilman によって、Cambridge School として建てられた。1948 年に Lesley Colledge はこの学校を下級学校として管理し、30 年以上も学校の主任を勤めた Harriet Ame Ellis の栄誉を讃えて、Lesley-Ellis 学校と名付けたのである。Lesley-Ellis School は 1968 年以来専ら nursery school と Kindergarten である。ここには Lesley Colledge の就学前教育の研究所もあり、カレッジの demonstration School の役割も果たしている。カレッジの教育実習生はここで訓練される。子供は 2 才半から 5 才半までのものである。午前と午後の組とがあり、両方へ出ることも出来る。週 5 日制であるが、週に 3 日しか来ないものもある。組は三つある。2 才半から 3 才半までが Nursery, 3 才半から 4 才半までが Preschool, 4 才半から 5 才半までのものが Kindergarten である。各の組はそれぞれの年齢に応じたカリキュラムを考えている。また障害児も受け入れるとある。

「写真をとってくれるな」「子供と目を合わせてくれるな」と注文されてから参観した。コーナー風にしてあり、部屋の中に砂場などもあった。然し建物が古く、外には大きな樹が茂っているので、部屋の中は暗かった。

この幼稚園の目標は、一人一人の子供の要求にあった就学前のプログラムを与えることであり、“Whole child” を養うことであった。つまり身体的、社会的、情緒的発達の統合を目的としているのである。

カリキュラムはアカデミックな二・三の領域に集中させないで、巾広い活動と結びついている。例えば積木遊び、大工仕事、或は戸外の遊びなどの中で学んでいくのである。子供たちは自由に自分から活動を選ぶのであるが、それぞれのグループのミーティングがあり、そこでプロジェクトについて教師と話し合うのである。

子供の記録をとることは重要である。一人一人の子供の進歩を追跡し、子供たちの活動の図表として記録される。標準テストによって形式的に子供を評価するのではない。この子供の記録に基づいて、それぞれの子供の水準にあったカリキュラムが計画されるのである。戸外には大きな樹の下に、大きな木材で作った高樓や小屋があり、木で作ったブランコの中に三人で乗れるものがあった。そういう金具があり、どこでも売っているといっていたが手にいれることは出来なかった。

Pacific Oaks School (714 West California Boulevard Pasadena, California)

Los Angeles の住宅街の中にあった。住宅街そのものが大きな樹の中にあった。この学校は檜の木があるので、校名としたかと考えたが、檜の木はなく大きなオリーブの木が沢山あった。葉も実も沢山落ちて汚ない学校であった。隣近所の民家をのぞくと綺麗に掃除が出来ていて、この学校が余計に汚く見えた。建物も木造の古いものがあちらこちらにあり、廊下なども1メートルもないせまいものだった。民家だったらしく、狭い部屋を改造してオープンシステムのコーナーをもうけてあった。母親が沢山来ており、カナダから女の先生が視察に来ていた。

この学校は1945年にFriend's Nursery Schoolとして、7人のQuaker教徒によって建てられた。1947年に法人組織となり、1959年にPacific Oaks Collodgeが建設された。

現在この学校は、Infant, Preschool, Kindergarten, Day Care, の四つに分けられ、よちよち歩きの幼児から9才までの、約200人の子供が11のクラスで教育をうけていた。

ここの教育哲学は、環境を出来るだけ自然のように手作りで作りに出すことによって、個人の成長を最も容易にすることが出来るとしている。そしてすべての人間はそれぞれ独自の重要性をもっているという信念、到るところですべての人と兄弟のようになるという感情、良い生活をするとは単純さと調和とを認めること、成長は一生の過程であることの理解の四つを教育目標としている。

部屋の中より校庭の方が注意を惹いた。大きな木にしつらえた物見櫓のようなどころへ登っていける施設、木で作られた3階建の高樓、木材で作った高いブランコ、ターザンみたいに高い木からぶら下っている綱で向う岸へとりつく施設。子供たちは楽しそうに勇敢に遊んでいた。

この学校のパンフレットには、学校への入学は何びとの子供といえども保証されていないと書いてあり、現在3000人の子供があくのを待っていると豪語していた。だが私にはそんな感じはしなかった。

University California, Los Angeles University Elementary School
(405 Hilgard Ave., Los Angeles, Calif)

ここも森の中にあった。新しい鉄筋建の平屋の綺麗な幼稚園であった。掃除も行き届いており、前のPacific Oaks Schoolとは感じが全く違っていた。州立であり、小学校と一緒にあった。

オープンシステムではない。教室は仕切られ、クラスが二つあった。4才から6才までの年令のちがった子供がまじっており、全部で60人。3人の先生が教育する。整理整頓しやすいように工夫されており感心した。

一日のスケジュールは、8時15分親が子供を連れてくる。子供が来たら顔写真のカードをひっくり返す。その裏側がロッカーでその中に持ちものをしまう。校庭で遊ぶ。45分位遊んで教室に入る。全部絨毬の上に坐る。テーブルの上にあるものを先生が説明する。子供が何で遊ぶかをきめ、3人の先生がテーブルからテーブルへと指導する。ゲームがすんだら後片付けをする。この後片付けが大切である。ゲームを終ったものが、絨毬の上にいき30分位本を読んだりする。その後で外で遊ぶ。その後は歌をうたったり、円くなって童話

をきいたりして、11時頃に帰る。残る人もおって午後のクラスに入る。そういう子供は弁当を持って来ている。食後遊んでから部屋の中に入る。読み書き、算数をしたり、お話を聞いたりして2時になると全部帰っていく。

ここの四つの大きな目標は、1.十分に感じさせる、2.独立心を養う、3.グループでゲームをさせる、4.名前を書けといった字の教育をする。その他算教、読書、字を書くこと、音楽、美術もする、ことだった。

園庭は芝生が綺麗で、その中に少しの遊具がおかれており、倒れた大きな樹もそのまま子供遊び場所になっていた。

広いベランダには数字が一杯書かれ、やはり数字を教えるのに使うようだった。

園長のMrs. Sally Breitに、オープンシステムに対する感想を聞いたら、「オープンシステムは先生方の協力がないと困難である。そういう考え方をとり入れ、ミックスしたここの教育の方がよい。」という答が帰って来た。

カナダとアメリカの幼稚園九つをみての感想を述べることにする。

まずMontessori 幼稚園は、所謂Montessori 教具を使う限りにおいては全く興味と関心を覚えなかった。Montessori 女史の考えを幼稚園教育の哲学にするところは別であるが。

Open systemはいろいろのCornerを設けたone roomの幼稚園である。子供にそのCornerを自由に選択させ、子供の自主性によって活動させる点はよいと思った。個人の自由、個人を尊重することに重点がおかれている。かつて北海道大学に交換教授として来日され、大阪でお話をしたことのあるMassachusetts 大学のDavid E. Day教授は、アメリカの幼稚園は個性を尊重することに重点をおき、日本の幼稚園はグループの一員になることに重点をおいているといわれたが、個性尊重は伝統もありアメリカ教育の根本的理想である。open systemはその点では全くよいと思う。

個性尊重であるから、同年令のもの全体に通ずるカリキュラムもないし、目標とするminimal essentialsもない。これが同行の日本の園長さんたちには、不満でもあり理解出来ないようであった。従って各個人の評価は他人との比較によってなされるのではなく、従って個人のそれぞれについてなされなければならない。各個人の記録しか作っていないのは当然である。

アメリカの幼稚園は、Kindergartenと名のっていない。何々センターとか、何々スクールとかいっていた。この点スイスでも同じである。つまり幼稚園だけの施設でない。日本のように幼稚園と保育所が分れているのではない。

幼稚園では大抵午前の組と午後の組と全日の組とがある。全日の組は保育所みたいである。年令も3才から5才までというのではなく、2才位から収容しているから、この点でも保育所的である。

Day教授によると、「アメリカの幼稚園の就園率は90%以上であり、幼稚園の95%以上が公立の幼稚園である。またNursery schoolは全部私立である。」ということだった。Open systemは公立学校では、全体の4分の1以下であるともいった。だからMontrealの公立の幼稚園、Los Angelesの州立幼稚園はopen systemではなかったのである。この点ヨーロッパの公立の幼稚園もopen systemではなかったようである。open systemは私立の幼稚園で行われており、それも比較的新しい幼稚園に多いのではないかと思われた。

Open systemの幼稚園では、個性尊重で自由でよいが、私には自由に振ふことだけでは自分勝手になり、我々人間が社会に生きていくためには種々のフラストレーションに耐える力が必要であるのに、それが養えないのではないと思われる。それでDay教授に幼稚園児からフラストレーショントレランスを養う必要があるのではないかと質問したら、それは必要だがただ時期と方法とが問題であると答えられた。

日本の幼児教育学者の中には、幼児教育は遊びでなければならないと主張し、教科的なものを蛇蝎視する人たちが多い。しかし欧米の幼稚園では、Open systemの幼稚園でも文字、読書、算数を見捨てていない。欧米の教育では3Rsの伝統は強いものだと思う。このことはスイスの幼稚園でも強く感ぜられた。日本の幼児教育者も、読み、書き、算数を見捨てるべきでない。ただ欧米の幼稚園でもいつているが、その与え方、つまり動機づけには十分気をつけなければならないが。

幼稚園を参観して気がついたことは、私立の幼稚園には男の先生がいることだった。公立の幼稚園では男の先生には会わなかったが。尋ねてみると男の先生が幼稚園に入りだしたのは、アメリカでもここ4年か5年前からである。日本でも次第に男の先生を要求する声が高くなって来つつある。私もいろいろ問題はあがあるが、必要性という点からは必要であると思う。

Day教授はアメリカの幼稚園の教育目標も混乱を来し、何を果たすかについて決まっていけないという。日本の幼稚園もいろいろの幼稚園があり、日本の幼児教育も混乱を極めているとよく言われる。しかし劃一にする必要はない。百花が乱れ咲くところがよいと思う。日本でもアメリカでも。

次にOpen systemの幼稚園が、日本で可能かということを考えてみたい。アメリカの私立幼稚園の費用は、年800ドルから1300ドル位であり、大体月100ドルと考えてよいであろう。日本でも月2万5000円を父母が出してくれれば可能である。欧米では幼稚園は大体1日2回保育する。1クラス12人としても午前と午後で24人となり、その収入は60万円となる。日本の月1万円としても、1クラス40人であるから40万円しかない。費用の点からだけでは、欧米なみに父母が費用を負担してくれれば、小人数の園児でopen systemは可能である。だが日本の父母にはその負担力はないであろうし、また半日という短時間の保育では満足しないであろう。だから少なくとも私立の幼稚園では当然open systemをすることは不可能であろう。

私はopen systemと西洋建築の特徴との関係にふと思いついた。Open systemで絵画のcorner、製作のcorner、読書のcorner等々がある。しかしそれぞれのcornerは一つの目的にしか使用できない。西洋の家は食堂、寝室、応接室等と一定の使用目的にしか使えない。一つの目的にしか使用できないことは、家の部屋もCorner制も同じである。それに対し日本の家の部屋は、客間にも寝室にも食堂にも何にでもなる。日本の幼稚園の保育室も、絵画製作も出来るし、音楽リズムも出来るしで多目的である。このことは園庭についてもいえる。大きな高樓を設けることは一つの目的にしか使えない。日本の幼稚園の運動場は、遊戯も出来るし、ドッジボールも出来るし、多目的である。だからopen systemは精神的にも個性の尊重をいう欧米の伝統から発生したものであり、建築様式とも関係があるといえるのではなからうか。だから日本は日本の伝統のままでよいというのではない。

ボストンのガイドは東京女子大学出身の人で、御主人はコロンビア大学へ医学の研究に留学して

て来ている学者であった。始めopen systemの幼稚園に自分の子供を入れたが、一日中これといったことをするのもなく、不安で仕方がなかった。だがやがて日本に帰える日が迫ってくると、日本にこんな教育をしてくれる幼稚園があるのかと不安になっているという。

私は一日中open systemにすることは出来ないが、幼稚園の一部にopen systemの空間を取り、園児を交替で一週間に一回でも二回でも経験させたらよいと思う。私はそんな広い空間がクラスの保育室の他に欲しい。そういう教育によって子供に自主性、自発性、創造性を養いたい。

参 考 文 献

Sherwood Kohn; The Early Learning center. Stamford, Connecticut.

The New York Times. Sunday, May 4, 1975.; Fostering Self-Esteem and love of Learning in Preschoolers.

Singer Learning Center for Early Childhood Education.;

What wondrous thing is he discovering?

Information About Lesley Ellis.

The Pacific Oaks Approach to Children's Programs.

知能教育第6号 小沢博・スタムフォード早期教育センター訪問記、田中日堂・シンガー

教育センターの視察、水口芳明・アメリカの幼稚園におけるオープンシステム雑感
文部時報第1177号 荘司雅子・世界の幼児教育

高松短期大学研究紀要第6号 水口芳明・スイスの幼児教育

高松短期大学研究紀要

第 8 号

昭和53年3月1日印刷

昭和53年3月10日発行

編集発行 高松短期大学
〒761-01 高松市春日町960

印刷 新日本印刷株式会社
高松市木太町2158